いってみっぺ 秋保

秋保氏の城館

里山の平場は曲輪の跡
街道のすぐそばに残る土塁
ふだんの街歩きや山歩きも、
歴史を知ればもっと面白い。

訪れてみたい秋保
二口街道ツアー 62

No.49

秋保氏の城館について、「秋保町史」を参考に現地を歩き、まとめてみました。

中世・戦国の世に築かれた秋保氏の城館は、草木が茂り荒れているところもありますが、土塁や空堀が残っており、自然の地形を巧みに活かした防御性重視の中世城館の特徴を備えています。その場に立つとどの城館も鳥瞰の利く絶好の場所に立地していて、最上氏や国分氏などからの侵略を危惧し、二口街道の守備と領有支配の拠点となっていたことが分かります。

当時の秋保氏の戦略を想像しつつ、豊かな自然の中で軽く一汗流しながら、そこかしこに城跡の面影残る里山めぐりはいかがでしょう。

① 楯山城（秋保氏総家）

秋保町長袋字亀ケ森山

秋保温泉から二口街道を西に向けて進むと、境野付近から見て左手に、山頂が平場でお椀を伏せたような独特の形をした山がある。ここが「楯山城」である。東西に長い秋保地区の中心部にあって、今なお秋保の人々に殿様のお城があった特別の山で、深い歴史のある場所として意識されている。

名取川と本砂金川、大柴沢に囲まれ連山から平地に飛び出した独立峰で、急峻な斜面と深い渓流が取り巻き、自然地形と人造物が加味された強固な山城の様相を備えている。

平家落人を由縁として勃興した中世秋保氏が、秋保五ケ村をまとめ支配するための一大拠点として築いた秋保郷きっての砦である。中世以降地区内に数ある諸館と巧みに連携を保ち、一族一派が一丸となって秋保の守備を司ったものと思われる。

秋保氏5代基盛のときに築城され難攻不落を誇ったが、伊達氏に従属する前、15代盛房の時に名取大曲の長井氏の奇襲を受け、城を奪われるという事態に見舞われる。しかし、その後布かれた長井氏の酷政に村民が反旗を翻し、山形へ逃れた盛房を呼び擁して、村民とともにこの城を奪回し、もって長井氏を滅ぼしたという逸話が残っている。

頂上部は約一反歩（約1000㎡）ほどの平場（二の丸）、その北側に一段高い平場で頂上となる本丸があり、眺望は絶景を極め、山麓の石神、国久、竹ノ内はもとより、湯向から森安までの各集落を望むことができる。名取川を挟んで境野館や境野東館、東の羽山（大倉山）と対峙し、更には遠く馬場の上館や豊後館も一望でき、中世武士の胸中を味わうことができる。

境野方面からの遠景。

登山口は、ガラス工房海馬が目印。最初から登坂となるが、20分ほどで頂上に達する。秋保郷全域を見渡すことができ、本丸の一角には楯山社の祠が祀られている。

② 長館（秋保氏本家）

秋保町長袋館

秋保小学校近くの丁字路を川崎町方面に進み、まもなく左折して入る細い市道沿いの家々が秋保家家中の子孫らが住む「館」集落である。この東方先300mの長さに亘って突き出た舌状台地に、戦国期以降、楯山城を有事の際の本拠とした秋保氏が、明治となるまで長く秋保郷を治めるため居館として築いたのが長館である。

名取川と獺沢川が合流するこの場所は、登攀を妨げる断崖絶壁の自然の要害となっていて、袋状の地形をなしていることから、「長袋」という地名の語源になったとも云われている。集落の入口から居館までは、枡形を備えた身の丈を越える4か所の土壇が築かれ、とりわけ先端部手前の「四の土手」は大規模で、頂部の幅が10mに達し、秋保氏の御屋敷を守る戦国期の特徴を備えている。

二口街道を挟んだ北側には、分家境野氏の「境野館」があり、いざ有事となれば長館も楯山城の前衛基地へと一変し、境野氏と連携しつつ、大旗山から「境野山城」「境野館」「長館」そして「楯山城」と、一体となって二口街道の守備を効果的に機能する構造となっていたことがわかる。

慶長8年伊達氏の仙台開府に伴い館主秋保氏18代直盛は、蔵王町小村崎村へ処替えとなり、長館は廃館となるが、藩政時代中期、仙台藩の奉行職を務めた23代氏盛のときに再び長館を居館とすることが認められる。その際に中世を再現したような家中集落「館」と、併せて二口街道の宿場集落「長袋町」が整備され、現在に至っている。

入口から長館跡への道すがら、枡形や土壇の跡、秋保家家中の子孫の家々が現存し、往時の雰囲気を醸し出している。館跡には、樹齢約500年の大イチョウと樹齢約300年と伝わる大ヒバがそびえ、長い歴史を見守っている。

道幅の狭い家中集落を進む。東端となる館の手前にはヒヨクヒバの古樹のほか、秋保氏の氏神の守として稲荷神社が祀られている。

傍らの大イチョウは秋保郷随一の幹回りを誇り、往時の歴史を伝えている。

③ 上館（馬場秋保氏）

秋保町馬場字北山

馬場小学校の北側、北山と称される山並みの東端、芋生川手前に突き出た丘陵に築かれたのが、秋保氏15代盛房の分家、弟盛義の居館「上館」である。

この場所は馬場と新川を結ぶ「芋生峠道」と、馬場と白沢を結ぶ「大雲寺峠道」の往還の起点にある。ここは二口街道と交わる極めて重要な馬場の咽頭部ともいうべき場所で、周囲は傾斜の厳しい自然の要害となっている。三反歩（約3000㎡）ほどの平場の周囲には、土壇や空堀が巡らされ、今は植林で薄暗いが、樹木がなければ馬場駅の町並みはもとより、滝原から境野に至る各集落や楯山城ほか各館の眺望が利くほか、北側は眼下に芋生峠を見下ろすことができるなど外敵に備えた構造となっている。

本家の盛房は、楯山城陥落という忌まわしい出来事に遭い、馬場の体制強化を図るため、楯山城奪還後に、弟盛義に馬場を分地し上館築城を任せたと云われ、3代目の定重が名取川河岸の「豊後館」に居館を移すまで使用された。

今は愛宕神社として祀られ、鳥居の先には館跡に登る苔むした石段が、神社の参道として整備されているためとても登りやすい。注意して歩くと急斜面と平場が交互に見え、3層の土壇の跡だと分かり、戦国期の物々しさを伝えている。

杉林の袂の鳥居が入口。長い石段を5分ほどで、馬場愛宕神社の長床門が見えてくる。参道から薄暗い杉林の中へ入ると土壇や空堀の痕跡に出くわす。

④ 豊後館（馬場秋保氏）

秋保町馬場字町南

馬場駅集落の入り口、小滝沢橋の袂から南に入り、宮城県の観光100選にも選ばれたことのある名取川の景勝地「白岩」に向かって進むと、左手東方に向けて広大な平場となる。大欅の袂に100mにおよぶ見上げるほどの土塁があり、これを含む東側が豊後館で、北に位置する「上館」に代わって永禄年間（1558年~1570年）に馬場秋保氏3代の定重によって築館された。

名取川と小滝沢が合流する断崖絶壁の内側、一反歩（約1000㎡）ほどの舌状台地にあり、秋保郷の他の城館よりも強固な作りとなっている。圧巻は土塁の南端で、石積みの虎口が枡形に整備された遺構が残っているほか、名取川の断崖との間を空堀・土壇・土塁・石垣積み・掘割などを施し、館内へ入るには幾重もの防御と監視体制をくぐりぬけなければならず、もって二口街道随一の城郭の様相を呈している。

馬場秋保氏は、定重の代に本家秋保氏とともに伊達氏に従属しているが、政宗の代となって境界領有の主導権を巡って最上氏と交戦が増し、二口峠に近い野尻では度々争いが起きている。伝承では、最上勢が野尻から迂回し、本砂金栃原を越えて豊後館対岸の「白岩」から、館に奇襲をかけ、定重の妻子を人質に陥落を企てるが、これをみごと撃破している。また最上氏と内通した深谷（石巻市桃生）領主、長江月鑑斉が、その一行とともに密かに二口街道を西へ逃亡しようとした際、政宗の命によりこれを誅殺するという出来事は、豊後館を舞台とした代表的な逸話である。

館主定重は政宗から絶大なる信頼を受け、数々の功績をたたえられるとともに、この館の普請にあたっては、秋保郷の百姓衆は総力上げて労力を提供し、いざ有事の時はこの館へ集結して、定重の指揮に従うようにという命令を受けている。このことから当時この館が、単なる馬場領内、秋保領内支配のための居館に止まらず、最上領との境界防衛上の軍事拠点という意義を持っていたことがわかる。

しかし伊達氏の仙台開府に伴い、秋保郷は藩の直轄地となり、定重は蔵王町円田村へ処替え、豊後館は築館後わずか40年余りで廃館となる。

以前は鬱蒼とした杉林だったが、近年伐採され、封印が解けたように開けて、立て看板などもあり歩き易くなっている。かつての曲輪の中に身を置くと400年以上の時を越えて武士（もののふ）の息吹きが感じられる。

土塁・空堀、枡形を巡らし、名取川の断崖上にある。自然の要害を利用した堅固な館、ここに立つと選ばれた場所であることがわかる。

⑤ 境野館・⑥ 山城（境野氏）

秋保町長袋字二の輪山

戦国時代末期、永禄年間に秋保氏から分家した境野氏の居館で、二口街道の守備強化のため築館された。境野地区の西端、名取川の支流獺沢川が二つに分岐する内側の突出丘陵の一反歩（約1000㎡）ほどの平場にあり、自然峡谷の断崖を利用した要害となっている。東側の獺沢川に渡された長さ10mほどの狭い土橋が唯一の出入口とされ、戦国期の居館らしい作りとなっている。居館の手前は深さ4mほどの巨大な空堀が敷かれ、館跡は周囲から見ると小高い丘のような地形になっている。その西側には一段下がって「西の窪」と称される一町歩（約1000㎡）ほどの広大な谷地の平坦部があり、湧水地や家中と思われる屋敷跡の痕跡などが残されている。また空堀越しの北側の壇上には中館と云われる補助館的な機能を担った屋敷跡の平場もあり、そこから背後の大旗山の山城へとつながる構造となっている。

館の南側からは獺沢川越しに二口街道を見下ろすことができ、本家秋保氏の長館と連携し、有事の備えとしたことがわかる。慶長8年仙台開府に伴う処替えまで約60年間用いられた。

境野館の山城は、大旗山の尾根を利用した3層の守備で、有事の際は境野館の詰館として、籠城を意識しながら、防戦を展開するという構成である。やけ山の平場の手前には、50mほどの土壇が二重に巡らされていて、この辺り一帯を総じて「二の輪山」とも呼ばれている。また大旗山は「大畑山」とも言われ、山頂の背後に畑があったと伝えられており、畑や水場を備えた、長期の籠城戦にも耐えうるものだったと云う。

館跡に至る山道があり30分程度で登ることができるが、一部荒れているところもあるので、道をはずれないよう注意が必要。籠城という戦況を想像しながら登ると、その境地にしびれるような緊張感が漂う。

境野館への通路は、ひと一人が通れるほど狭い土橋を渡る。平場に立つと長館と楯山城が間近に見える。大旗山の山城は、三部構成いずれも歩いて上ることができる。

⑦ 境野東館（境野氏）

秋保町境野字森峯山

境野地区北側の連山から続く尾根が南へ突出し丘陵部となっている「森峯山」に位置し、総延長300mほどになる細長い地形の西側の小高い平場にある。杉の沢の断崖で背後を守りつつ、旧二口街道と愛子方面を結ぶ板嵐峠道を監視できる丘陵上に位置する。

秋保氏から分家した境野氏が、居館「境野館」整備後に板嵐峠道方面から侵入する外敵防御等有事に備え設置したものと云われ、井戸や古墓など境野家家臣やその使用人らが居を構えた痕跡を残している。

標高がそれほど高くない丘陵地でありながら眺めが良く、集落全体の景観はもとより、大東岳や糸岳、楯山や羽山（大倉山）、遠くは蔵王連峰まで見渡すことができ、「見張り場」としての立地環境にうなづける。

森峯山は、樹木や竹が茂り荒地化していたが、近年地域の有志によって整備が進められ、往時の眺望が復活している。また桜の名所としても知られるようになり、地域のシンボル的な資源として大切に守られている。

⑧ 湯元小屋館（馬場秋保氏）

秋保町湯元字鹿乙

※私有地のため許可がなければ入れないので注意！

天守閣自然公園の東端部、オートキャンプ場の南にそそり立つ岩壁の上に位置し、秋保温泉から続く旧二口街道を手前に見下ろせる場所にある。戦国時代の終わり、湯元地区の守備を任された馬場秋保氏の定重が築いた館で、大倉山の東側、井戸沢を介して侵入する川崎方面への守備をはじめとした東部秋保郷の有事に備えた砦として設置された。

戸谷沢と小森沢の急峻な崖の上で、旧二口街道筋の岩壁を含めると四方が切り立った断崖で、極めて強固な館だったことがわかる。館跡は下からの眺めでは想像できないほど広い平場となっており、東端は秋保温泉地区が一望でき、湧水地や空堀、身の丈ほどの土塁が約30mにわたって巡らされ、馬場秋保氏の家中や兵士が常駐していたものとされる。

二口街道を見下ろす北側の断崖上には、小さな雷神祠があり、その場所からは境野館の山城である大旗山や東館の森峯山、秋保氏の本拠楯山まで遠望が利き、見張り場としての機能に長け、戦の際には秋保郷の各館が、のろし等で相互に連絡がとれる体制だったことがわかる。

断崖と堀切を組み合わせた固い守り、断崖に立つ雷神祠から秋保郷を見通すと、気分は戦国期の見張り番兵となる。

旧二口街道沿いから見える荘厳な断崖の岩山、それは自然の城郭というべき要害の地形を成している。湯元地区の砦に相応しい立地環境にあることが分かる。

いってみっぺ
秋保
秋保氏の城館

企画・発行：秋保地域資源活用委員会・仙台市
連　絡　先：秋保総合支所総務課（022-399-2111）
　　　　　　秋保市民センター（022-399-2316）

掲載されている情報は、令和6年3月現在のものです。